

マトゥラーにおける仏像誕生の状況について

—マトゥラーの神像崇拜をめぐって—

A Study on the Context behind the Birth of Buddha Images at Mathurā: Focusing on the Cult of Divine Images at Mathurā

永田 郁

Kaoru NAGATA

崇城大学芸術学部美術学科准教授

*Associate Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：マトゥラー、民間信仰、神像、ヤクシャ、パーンチャ・ヴィーラ、「菩薩」在
銘仏像

Keywords: Mathurā, Folk Cult, Divine Images, Yakṣa, Pāñca Vira, Buddha Images Labeled as “Bodhisattva”
in the Votive Inscriptions at Mathurā

Abstract

This paper aims at reporting on the context behind the birth of Buddha Images at Mathurā with focusing on the cult of divine images at Mathurā. In Ancient India, the images of Buddha (Śākyamuṇi) emerged at Gandhāra and Mathurā under the dynasty of Kushān. Both images had different styles: Gandhāran images with western looking and Mathurā images with traditional Ancient Indian looking. What is the differences of each style, the Buddha images at Gandhāra & Mathurā?

In this paper, at first we pay attention into the religious situations of Mathurā, where the first Buddha images emerged within India proper. With except Buddhism, the religious situations at Mathurā are mainly divided into three: folk cults (Yakṣa, Nāga and Pāñca Vira etc.), Hinduism and Jainism. We examine each religious situation under the dynasty of Kushān at Mathurā to reflect on the acceptance of the Buddha images at Mathurā, especially Mathurā Buddha images labeled as “Bodhisattva” in the votive inscription. Through catching the religious situations at Mathurā, we would like to reconsider the meaning of label as “Bodhisattva”, trying to clarify the context behind the birth of the Buddha Images at Mathurā under the Kushān Dynasty.

はじめに

インドにおいて仏陀の姿、すなわち仏像はガンダーラとマトゥラーそれぞれの地域で全く異なる様式の仏像を出現させた。ガンダーラはギリシア・ローマといった西方世界との接触を通して現実的な仏陀の像を生み出し、一方マトゥラーはインド的な土壌に育まれた逞しい肉体性をもつ仏陀の像を生み出した。この造形の違いはどこにあるのだろうか？

本稿では、マトゥラーにおける仏像の誕生がどのような宗教的な土壌で起きたのかについて注目し、マトゥラーの仏像誕生の状況をマトゥラーの宗教活動の関わりを通して考えてみたい。西方世界に「神々のまちマトゥラー（モドゥラ）」と知られたマトゥラーがどんな信仰があった土地柄であったかを探り、仏教以外の他の信仰との関係の中でマトゥラーにおける仏像の受容という問題を考えてみたい。

さらに本稿ではマトゥラーにおける「菩薩」在銘の仏像について、先行研究を渉猟しながら、その「菩薩」なる語が仏教不表現の伝統が強いマトゥラーにおいて仏陀像の実現へと向わせるための仏教界の妥協策であったのかを検証することにより、「菩薩」在銘像はクシャー朝マトゥラーにおいていかに受容されていたかについてみたい。

その点を明らかにすることで、菩薩像の展開においてインドの辺境であるガンダーラにおいては菩薩像（観音・弥勒菩薩など）が躊躇なく造像されたのに対して、インド内部では菩薩の造像が進まなかったの

かの手掛かりを提供してくれるのではないかと考えている。

1. 古代インドの民間信仰の情况

(1)文献資料にみられる民間信仰の様相

本章ではまず古代インドにおいていかなる民間の神々が信仰されていたかを確認し、古代インドにおける宗教的な土壌をみてみたい。民間信仰の様相を伝える資料、ここでは主要な二つを取り上げ、そこに登場する民間の神々をみてみよう。まず第一の資料は *Mahāniddeśa* である。そこでは *vatika*（サンスクリットで *vratika*）として以下の21の民間信仰の神々の信仰者が挙げられている⁽¹⁾。

A. *Mahāniddeśa*

1. *Haththivatika*（象神の信仰者）
2. *Assavatika*（馬神の信仰者）
3. *Govatika*（牛〔牡牛〕神の信仰者）
4. *Kukkuravatika*（犬神の信仰者）
5. *Kākavatika*（鴉神の信仰者）
6. *Vāsudevavatika*（ヴァースデーヴァ神の信仰者）
7. *Baladevatika*（バラデーヴァ神の信仰者）
8. *Puṇṇabhaddavatika*（プールナバドラ・ヤクシャの信仰者）
9. *Maṇibhaddavatika*（マニバドラ・ヤクシャの信仰者）
10. *Aggivatika*（アグニ神の信仰者）
11. *Supannavatika*（スバルナ／鳥の信仰者）
12. *Yakkhavatika*（ヤクシャの信仰者）
13. *Asuravatika*（阿修羅の信仰者）

14. Gandhabbatika (ガンダルヴァの信仰者)
15. Mahārājavatika (マハーラージャの信仰者)
16. Chandimavatika (月神の信仰者)
17. Sūriyavatika (太陽神スーリヤの信仰者)
18. Indavatika (インドラ神の信仰者)
19. Brahmavatika (ブラフマー神の信仰者)
20. Devavatika (デーヴァの信仰者)
21. Disāvatika (方位神の信仰者)

なお、この“vatika”なる語については南伝大蔵経第四十二巻小部經典所収の『大義釋』における該当箇所では「～務者」と訳し、1. Haththivatika は「象務者」とし、注釈では「すべての象の動作をなす者なり。…(中略)…此等の務めを行ふ沙門・婆羅門はそれによりて死後生天すと信じて行へるなり。」と解説している⁽²⁾。一方、6. Vāsudevavatika 以下については誓って世天 (Vāsudeva) 等を礼拝する者、すなわち、信仰者をさすものであろうとしている⁽³⁾。

もう一つは前2世紀頃の西北インドを支配していたギリシア人王メナンドロスと仏僧ナーガセーナの仏教教理についての問答『ミリンダ王の問い』である。その第四章の第二「教団規律の秘匿」のところで、戒本(パーティモッカ)の読誦と全律蔵(ヴィナヤ・ピタカ)は比丘以外に一般人には秘匿され隠されたことに関するメナンドロス王の問いに対して、それはいにしへの如来の慣習であるとして、その喩えとして神々に関する秘密の儀式を行う人々(gaṇa: 集団)として以下の神々の名前を

列挙している。

B. 『ミリンダ王の問い』

1. Pabbatā (山の信仰者)
2. Dhammagiriya (Dharmagiri/丘の信仰者)
3. Brahmagiriya (Brahmagiri の信仰者)
4. Pisachchā (ピシャーチャの信仰者)
5. Maṇibhaddā (マニバドラ・ヤクシャの信仰者)
6. Puṇṇabhaddā (プールナバドラ・ヤクシャの信仰者)
7. Chandimā (月神の信仰者)
8. Siridevatā (シュリーデーヴァターの信仰者)
9. Kālidevatā (カーリー神の信仰者)
10. Śiva = Śaiva (シヴァの信仰者)
11. Vāsudevā (ヴァースデーヴァ神の信仰者)

等である。そして上記のそれぞれの秘儀は同一の集団にだけ伝持されて、他の残りの集団に対して秘匿されていると記されている⁽⁴⁾。

以上の文献資料から古代インドにおいてさまざまな民間信仰の神々が信仰されていたことが窺える。AとBに共通するものとしてヴァースデーヴァ、マニバドラ・ヤクシャ、プールナバドラ・ヤクシャ、その他月神があり、Bの『ミリンダ王の問い』では、シヴァ神の信仰も言及されるなど、古代インドにおける仏教以外の多様な信仰の様相を伝えるものとして非常に重要である。

特にヴァースデーヴァ神の信仰は、ヴィディシャー(ベースナガル)所在の「ヘリオドロス」柱にみられるように前2世紀末にすでにその信仰の痕跡を確認でき⁽⁵⁾、その他ヴィディシャーからは同時代に獅子・

象柱頭の断片（ロハンギ丘）やコルカタ・インド博物館所蔵のクベーラの棲処を象ったカルパ・ヴリクシャ柱頭の存在も知られ、これらも当時の民間信仰の様相を伝える遺例として重要である⁽⁶⁾。ヤクシャに関しては後述するが多くの遺例があることは周知のことであろう。古代インドにおいては仏像誕生以前に上記のように多様な民間の神々が信仰されていた土壌であったことは、本稿で論じるマトゥラーにおける仏像誕生の状況を考える上では前提としてまず確認すべき事項であろう。

(2) 仏教經典にみられるマトゥラーのヤクシャ信仰の情況

まず上記において古代インドの宗教的な土壌を確認し、古代インドにおいてさまざまな民間信仰の神々（ヒンドゥー教のシヴァを含む）が信仰を受けていたことがわかった。そして、次にインドにおける仏像誕生の地マトゥラーにおける宗教的土壌を探ってみたい。

仏像誕生の地マトゥラーはガンジス川流域地帯の西端に位置し、西北インド側からみれば、ガンジス川流域地帯への入口であり、また中央インドや南インドへの入口であり、西インドに栄えた海港都市にも通商路を介して繋がっており、古代の交通の要衝として栄えた⁽⁷⁾。また、古来より宗教が盛んな町であり、2世紀のギリシアの地理学者プトレマイオスは「神々のまちモドゥラ」と呼び、西方世界にもその名が知られていた。更に当地はクリシュナ信仰の聖地であり、インドで仏像が誕生したクシャーン時代は仏教をはじめ、ヒンドゥー教、

ジャイナ教の他民間信仰の神々を含め盛んな宗教活動が行われていた⁽⁸⁾。

そこで仏教側からみた極めて興味深いマトゥラーの記述がある。それについては既に杉本卓洲氏の論考があるので、氏の論考を参考にしてマトゥラーがどんな処であったかみてみよう⁽⁹⁾。

Pāli 仏典 *Anguttara-Nikāya* (III.256) には、マトゥラーに関しての記述があり、すなわちそこには五つの障害 (*adīnava*) があり、仏教側にとって住み難き処と言われるのである。その五つの障害とは①土地が平らでなく、②塵が多く、③兇暴な犬、④猛きヤッカが多くおり、⑤乞食しても得難いと言及している⁽¹⁰⁾。

また同様の記述が『根本説一切有部毘奈耶葉事』巻第10にある⁽¹¹⁾。すなわちマトゥラーでは、①土地に高低あり、②株や棘を本性としており、③石や砂や礫が多く、④人々は月の出ていない時分に食事をし、⑤大勢の女性が居るとされる。この後に次のような話が付けられている。

仏教信者の長者や婆羅門たちは世尊がマトゥラーで乞食するものの、多くのデーヴァタ（ヤクシャ・ヤクシー）に悩まされ、マトゥラーに入れないでいることを聞く。そこでバラモンたちは世尊の処へ行き、マトゥラーの人々を悩ます *Gardabhaka Yakṣa* を調伏して下さいと頼む。そして *Gardabhaka Yakṣa* を諭し、彼とその500の眷属を調伏し、そして信者らはそこに500の僧院を造った。そして世尊は池の *Yakṣa*、森の *Yakṣa*、*Ālikāvendā Maghā Yakṣa* とその500の眷属を調伏した。そしてマトゥラー内外に住む2,500のヤクシャたちが調伏さ

れ、2,500の僧院が造立されたと伝えている。

上記でみたようにマトゥラーは幾つも障害があり、仏教側にとっては住み難い処であり、また多くのヤクシャ、ヤクシー等の蔓延る異教の地であったことがわかる。実際マトゥラーにはポスト・マウリヤ朝時代以降、後述する信仰対象としての石彫の丸彫神像が多数出土しており、『根本説一切有部毘奈耶薬事』が伝えるような状況であったことは想像に難くなく、そういった状況の中クシャーン朝時代に仏像は当地に誕生するのである。

(3)マトゥラーにおけるヤクシャの神像の実作例

実際、マトゥラーおよびマトゥラー周辺においてどれだけのヤクシャの丸彫神像が制作されたかについて、既に拙稿で紹介しているが⁽¹²⁾、今一度確認のため、近年紹介されたものも含め主要なものを以下に列挙しよう（ここでは丸彫神像のみ）。

- ①パールカム（マトゥラー南22.5 km）出土、ヤクシャ立像、マトゥラー博物館（GMM. no.C1.）（図1）
- ②バローダ村（マトゥラー南19 km⁽¹³⁾）出土、ヤクシャ像（上半身のみ）、マトゥラー博物館（GMM. no.C23.）⁽¹⁴⁾
- ③パルワル（マトゥラー市近辺）出土、ヤクシャ像（上半身）、ラクナウ州立博物館（SML. O.107）⁽¹⁵⁾
- ④バラーナ・カラン（マトゥラー北西32 km）出土、ヤクシャ（アグニ）立像、マトゥラー博物館（GMM. no.87.146.）⁽¹⁶⁾
本像は銘文からアグニの像と同定される

⁽¹⁷⁾。実際後頭部に火焰の意匠の頭飾を被っている。（図2-a, b）

- ⑤バラーナ・カラン（マトゥラー北西32 km）出土、ヤクシャ立像、マトゥラー博物館（GMM. no.87.145.）⁽¹⁸⁾

本像は手には右手の剣の束、左掌に子供を置いていた（図3）。

- ⑥ノー（マトゥラー南西41 km、Bharatpur 近く、ラージャスタン）出土、ヤクシャ立像、現地に安置⁽¹⁹⁾。

- ⑦ノー（マトゥラー南西41 km、Bharatpur 近く、ラージャスタン）出土、ヤクシャ立像、バラットプール州立博物館（no.213.64）⁽²⁰⁾

- ⑧ヴィラバイ（ヴィラバイ、ラージャスタン、ノー村から9.66 km）出土、ヤクシャ立像、バラットプール州立博物館（no.301）⁽²¹⁾

本像は腰帯（臀部左）から剣を下げている（⑤バラーナ・カラン像参照）。ただ、本像を剣を持つことから、英雄神ヴリシニ像の一つとする見解もある⁽²²⁾。

- ⑨マトゥラー出土、ヤクシャ立像、マトゥラー博物館（GMM. no.56.4248）⁽²³⁾

- ⑩マトゥラー出土、ヤクシャ頭部、クリーヴランド美術館（no.1962.45）⁽²⁴⁾

- ⑪ジングキ・ナガラ（マトゥラー南西11.3 km）出土、ヤクシー倚坐像、マトゥラー博物館（GMM. no.72.1）⁽²⁵⁾（図4）

以上、管見の限り、マトゥラーおよびその周辺から出土したヤクシャ・ヤクシー像は11例にも及び、上記の文献のマトゥラーに関する伝承とも対応していよう。特に上記の丸彫神像の作例は時代的に言えば、紀

元前2～前1世紀頃に制作されたものとみられ、マトゥラーで仏像が誕生するまでには今少し時間を俟たなければいけないが、こういった状況の中から礼拝像としての「仏像」が登場してくるという点は無視することはできないだろう。

また、上記のような民間信仰の神像がどのような目的で造立されたかについては、中インドのグワリオール南のパワーヤー出土のヤクシャ（マニバドラ）立像（図5、グワリオール考古博物館）の台座に刻まれた寄進銘が非常に参考となる⁽²⁶⁾。銘文の内容は以下の通りである。

「王にして主なるシヴァナンディの紀元第4年、夏分第2月の12日、この日にギルドなるマニバドラ誠信を捧げる人々（Mānibhadra-bhaktā）、胎児を得たことを喜べる人々が、尊き（bhagavato）マニバドラ像を造立した。ギルドに対し、その尊者は長寿、力、弁舌、幸福、繁栄を与えんことを。バラモンなる gotama, kramāra, バラモンなる Rudradāa, Śivatradāya, Śamabhūti, Jīva, Khamjabala, Śivabhadra, Kumaka, Dhanadeva の寄進。」（杉本1983：82）

この銘文からマニバドラ・ヤクシャがギルド（マニバドラを信奉する人々、子宝を得た人々）によって造立され、寄進者たちに長寿、力、弁舌、幸福、繁栄が成就するよう祈願され、種々の祈願の対象とされていたことがわかり、さらに寄進者に名を連ねている人々がバラモンをはじめ、シヴァ神を信奉する人々も含まれていることがわかる⁽²⁷⁾。また銘文中にある“bhagavato”は、バクティ Bhakti 信仰を受けていたことを示すもので、これはクシャーン朝時代の仏像

の銘文に共通するものであり⁽²⁸⁾、注目に値する。

2. クシャーン朝マトゥラーにおける仏教以外の宗教活動について

以上前章において、古代インドにおける民間信仰の様相およびマトゥラーにおける民間信仰のうち、ヤクシャの信仰の様相を文献と実作例を通して、概観した。そこで浮かび上がってくるのが、マトゥラーにおいては特にヤクシャ信仰が非常に盛んであり、仏教側からしても仏教布教という点で非常に困難の多い処であり、そのことはポスト・マウリヤ時代以降（前2世紀末から前1世紀頃）制作とみられるヤクシャ・ヤクシーの丸彫神像彫刻が多く発見されていることから推察できるであろう。

そして、その状況下でクシャーン朝以降になって仏陀の像、すなわち仏像の誕生をみるのである。そこで本章ではヤクシャの神像彫刻以外のヒンドゥー教、ジャイナ教他の神像彫刻を含めた作例を整理し、クシャーン朝下の宗教活動についてみてみたい。

(1)ヒンドゥー教

クシャーン朝下の宗教活動については既に高橋堯英氏の論考⁽²⁹⁾があり、それを参考に仏教以外の宗教活動を概観しよう。

まずはヒンドゥー（バラモン）教の宗教活動の様相をみてみよう。例えば、1910年に発見された Isapur 近くのヤムナー河の河床からバラモン教の供儀の祈念として建立された柱（yūpa, sacrificial post）の銘文によ

ると、カニシカ暦の第24年、すなわちカニシカ王の後を継いだヴァーシカ王の即位直後の夏の第4月の30日に、ドロナーラというバラモンによって12日間続いた供儀が催され、供儀で用いられた木製の柱を模した石柱がこの大きな供儀を記念するために建立されたと伝えている⁽³⁰⁾。その他、ヴァルナの最高位であるバラモンがクシャトラパの封建領主から経済支援を受けて生活していた様子がわかる銘文も発見されており、クシャーン朝下で公的にバラモン教がクシャトラパたちから支援を受けていたとみられている⁽³¹⁾。高橋氏は『マヌ法典』にマトゥラー地域をBrahmarshideśa（バラモンの聖者の国）と呼んで尊んでおり、マトゥラーとバラモン教との密接な関係を指摘している⁽³²⁾。このようにヒンドゥー（バラモン）教の盛んな宗教活動の一端が窺える。

それでは神像についてはどうだろうか？この時代のヒンドゥー（バラモン）教の遺品としては、例えばカンカーリー・ティーラー出土のカールティケーヤ立像（図6、マトゥラー博物館）が挙げられる。この像は左手に槍を執る軍神としての像であり、槍を取ると菩薩像と区別のつかない容貌であるが、銘文により、カールティケーヤの像とわかる⁽³³⁾。この神はグプタ朝以降シヴァの息子という地位を確立するが、それ以前は非アーリヤ的な土俗的な性格を示しており、疫病神である一方、カールティケーヤ、すなわちスカンダを崇拝する者には生命と活力を与え、この神の信仰が盛になると神々の「將軍」という地位にまで上がる⁽³⁴⁾。本像はまさに神々の「將軍」に相応しい姿であろう。

その他、太陽神スーリヤ像（図7）、バガヴァーン・ナーラーヤナ像（図8、丸彫像）などが礼拝像として挙げられ⁽³⁵⁾、クシャーン朝後期からヴィシュヌ⁽³⁶⁾やドゥルガー像⁽³⁷⁾など小品ながら作例がみられるようになる。その中でヒンドゥー四神を表す小浮彫（図9、マトゥラー博物館）においては、向って左から両性具有のシヴァ、四臂のヴィシュヌ、ガジャー・ラクシュミー、クベーラを表し、図像的にもグプタ時代以降に発展する形式の幾つかを示している⁽³⁸⁾。ガジャー・ラクシュミーはヴィシュヌの神妃とされるが、クシャーン朝においてはクベーラとともに表される作例も少なくなく、ヴィシュヌの神妃ラクシュミーが確立されていない段階の作例として注目に値する。その他、ラクシュミーについてはヴィーマヤカニシカなどのクシャーン王侯像が発見されたマート遺跡は、ヴィシュヌの神妃ラクシュミーを祀った寺でバラモンたちが管理していたという説もある⁽³⁹⁾。

シヴァの信仰については、クシャーン朝ヴィーマ・カドフィーセスの貨幣の意匠にシヴァ神のタイトル sarvalokeśvara maheśvara を確認でき⁽⁴⁰⁾、カニシカ王やフヴィシカ王時代の貨幣の裏にはシヴァとともに乗り物ナンディンの意匠が用いられているように⁽⁴¹⁾、クシャーン朝時代のシヴァ信仰の隆盛の様相をみることができる⁽⁴²⁾。そのことを裏付ける遺品として、紀元前1世紀に遡るとみられるシヴァ・リングも出土しており、例えば、カンカーリー・ティーラー出土のリング（ラクナウ州立博物館所蔵）やマトゥラー出土の一面のシヴァ・リング（フィラデルフィア美術館所

蔵)などである⁽⁴³⁾。また浮彫では、ブーテーシュワル出土の作例では欄楯に囲まれた聖樹の前にリングが安置される例(図10)やアーチ型の龕の中に台座にのるリングが表され、それをインド・スキタイ風の服装の二人の男性が花綱や蓮華の切り花を供養する場面がみることができ(図11)、特に後者は異民族によるシヴァ信仰の様相として非常に貴重であろう。

以上のようにクシャーン朝マトゥラーにおいてヒンドゥー教が文献および作例を通して盛んな様相が推察できよう。

(2) ジャイナ教

仏教とほぼ同時に開かれたジャイナ教についてはマトゥラーは重要な拠点であり、特にカンカーリー・ティーラーを中心に栄えたとされる。当地からは女神アーリヤヴァティーを高浮彫りした作品が出土しており⁽⁴⁴⁾、クシャーン朝以前のサカ族支配期に在家信者のアーモーヒニーという女性が寄進した旨の刻文がある⁽⁴⁵⁾。また、アーヤーガパタと呼ばれる種々の装飾文様を表し、中央にジナ像を表すジャイナ教特有の奉献板が多数出土している⁽⁴⁶⁾。

一方、カンカーリー・ティーラーからは一部仏教関係の遺品、例えば二龍灌水の仏伝図⁽⁴⁷⁾や初期の仏像とみられる「仏陀と王者」を表す仏伝図(図12)も出土しており、また前述のカールティケーヤ像(図6)やスーリヤ像などもみえ、ジャイナ教、仏教、ヒンドゥー教の共存が認められ、マトゥラーの宗教事情を物語っていると言えよう。ジャイナ教の祖師像であるジナ像については仏像と相前後して制作されるようになっ

たようである⁽⁴⁸⁾。

(3) ヴィーラ(英雄神)像、その他

以上、ヒンドゥー教、ジャイナ教の宗教活動の様相を概観した。その他、マトゥラーにおける宗教事情を紹介したい。特に神像崇拜およびマトゥラーの宗教事情として特色あるものを幾つか挙げてみたい。

その中でマトゥラーのモーラー出土のいわゆる「モーラー井戸碑文(*Morā Well Inscription*)」には、モーラーに5人のヴリシュニー族の英雄すなわちパンチャ・ヴィーラ⁽⁴⁹⁾を祀った石造の神殿があったことを記している⁽⁵⁰⁾。実際、モーラーからは男性トルソが2体が発見されており、それらが恐らくパンチャ・ヴィーラのうちの2体の神像とみられる(図13, 14)。また、同地出土の入口側柱の銘文にはヴァスなる人物(王)によってパンチャ・ヴィーラのうちのヴァースデーヴァを祀る寺院(石造りの塔門と欄楯)が造られたことが伝えられている⁽⁵¹⁾。その他、モーラーからは女性の像1体も出土している⁽⁵²⁾。特にパンチャ・ヴィーラのうちのヴァースデーヴァ信仰についてはマトゥラーだけでなく、西インド、中インドからもヴァースデーヴァ信仰に関わる遺品が出土しており、インドにおいてヴァースデーヴァ信仰が先述の *Mahānidessa* や『ミリンダ王の問い』においてのその信仰の名が挙げられていたように、その信仰が非常に盛んであった様子がわかる⁽⁵³⁾。そして、この民衆の人気を博したヴァースデーヴァ信仰は次第にヴィシュヌの信仰の中に組み込まれていく。

特に上記のパンチャヴィーラ像に関して

は少し時代が下るが、南インド、アーンドラ地方（コンダモトゥ出土）に、中央にヴィシュヌの化身であるナラシンハを表し、その左右に5体のヴィーラ像を表す小浮彫が存在している。そこではヴィーラ像はいずれも逞しい体躯に王侯貴族のような豪華な装身具を身に付ける姿で表され、それぞれの持物を執る⁽⁵⁴⁾。すなわち、①杖と先頭に飾りのついた長い持物、②法螺貝、③弓と矢の束、④杯、⑤剣と楯である。残念ながら、マトゥラー・モーラー出土像にはトルソ断片で、持物が確認できないが、逞しい体躯表現には共通性を看取できよう。しかしながら、マトゥラーには上述のヤクシャ像の中の⑧ヴィラバイ出土像は臀部に剣を掲げており、またマトゥラーには王侯貴族の姿をした像が槍のような持物を執る作例が見出され、丸彫像という観点からもヴィーラ像である可能性も否定できないであろう。更に言えば、マトゥラーからはこの他、尊格未比定神像が認められ、仏教尊像（菩薩像？）なのか否かが判断のつかないものも存在する⁽⁵⁵⁾。上述のカールティケーヤ像のように銘文から尊格を同定できるものがあるものと、ないものがあり、特にヤクシャ像やヴィーラ像についてはいわゆる仏教の菩薩像とも造形的な共通性を有しており、判断が難しい部分もある。

その他の、ヒンドゥー、ジャイナ教以外の宗教事情を像崇拜という点でみていくと、カニシカ王立像やウェーマ・カドフィセス王倚像といった支配者たちの彫像も神像に近いものとして存在している⁽⁵⁶⁾。本稿では取り上げていないが、ナーガ信仰もマトゥラーは盛んであり、多くの神像彫刻を残し

ている。特にフヴィシカ寺が存在したジャマルプル・マウンドにおいて、カニシカ暦26年の段階ではダディカルナ龍王が祀られていたことがわかり、チャンダカ兄弟というマトゥラーの俳優がナーガの祠堂に石板を奉納している⁽⁵⁷⁾。さらにカニシカ暦77年にダディカルナ龍王の祠堂の司祭デヴィラがフヴィシカ寺に柱基を寄進しており⁽⁵⁸⁾、当地においてダディカルナ龍王祠堂が仏教寺院と併存して存在していたことがわかり、民間信仰と仏教が共存繁栄をしていた事実が報告されている⁽⁵⁹⁾。

以上、仏教以外のクシャーン朝時代における宗教活動の様相を概観した。次章では上記のマトゥラーの宗教活動を踏まえて、マトゥラーにおける「菩薩」在銘仏像についてみていきたい。

3. マトゥラーにおける「菩薩」在銘仏像をめぐって

(1)マトゥラー仏の「菩薩」銘の見解について

まずは最近公刊された安田治樹氏のマトゥラーの「菩薩」在銘像に関する論考⁽⁶⁰⁾を参考にして、これまでの「菩薩」在銘に関する見解を整理してみよう。

近年のイ・チュヒョン（Ju-Hyung Rhi）教授の研究⁽⁶¹⁾によると、マトゥラーのクシャトラパ時代からクシャーン時代にかけての王銘ないし紀年銘のある仏・菩薩像が34例が知られる。それに加え年記はないものの尊名を刻するものが10例とし、銘記を有する仏・菩薩像は合計44例を挙げている。その作例から尊名の呼称をみると、

「菩薩 Bodhisattva」と称するものが多数を占めるとしている。その点については杉本卓洲氏も指摘しており、杉本氏はクシャトラパ時代からクシャーン時代の王銘ないし紀年銘のある作例53例を対象にその種類を整理した⁽⁶²⁾。その結果は次の通りである。

- (1) 「菩薩」坐像 15例
- (2) 坐像 (含「弥勒菩薩」) 14例
- (3) 「菩薩」立像 4例
- (4) 「シャーキャムニ」坐像 3例
- (5) 「シャーキャムニ」立像 3例
- (6) 立像 3例
- (7) 「ピターマハ」立像 2例
- (8) 「世尊」坐像 1例
- (9) 「仏陀」坐像 1例
- (10) 「アミターバ仏」 1例
- (11) 像容不詳なもの 5例

である。この結果からも他の尊名に対し、「菩薩 Bodhisattva」が多数を占めることがわかる。

また、この「菩薩」の呼称の年代についてイ教授は前1世紀後半、サカ族クシャトラパ、ラージュヴラ Rājuvula、その子ショーダーサ Śodāsa の統治に始まるクシャトラパ時代の後期(後1世紀中頃から約1世紀間)の初期像から登場し、ポスト・クシャーン時代(3世紀後期から4世紀初葉)まで用いられ、「仏陀像」他とするものは少数で、遅くからしか登場しないとしている。さらにクシャトラパ時代(前1世紀後半～後2世紀前期)に属する在銘像3例のうち、2例までが「菩薩」像、カニシカ紀元の紀年銘のある像でも、その初期のものはすべて「菩薩」と銘記する。

「仏陀像 Buddha-pratimā」または「世尊

シャーキャムニ Bhagavat Śākyamuni」と銘する例は2世紀後期頃からしか現れないと指摘している。したがって、マトウラー仏はその像容が明らかに仏陀像(図15)でありながら、銘記では「菩薩」としている点は非常に興味深く、従来さまざまに議論されてきている。

例えば、カトラー出土像(図15)で配された菩提樹は釈迦固有のものであり、ボードガヤーの菩提樹下における成道を意図したとみられるが、銘文に「菩薩」とあるのは、菩提樹下で今まさに仏陀にならんとする直前の、菩薩である釈迦、すなわち因位の釈迦の姿とも解釈されている。また、その「菩薩」なる語についても、当時マトウラーの状況においては碑銘から大衆部 Mahāsaṅghika が優勢であったことが知られており、その語が大乗的菩薩を意味したとは言えず、またその像容からも「菩薩」という呼称は釈尊を指していることは間違いないであろう。

高田修博士はこの「菩薩」なる語を用いた理由に関して、仏陀不表現の伝統の濃いマトウラーにおいて仏像造立へ踏み出すに際しての、当地の仏教界のいわば躊躇、逡巡を反映していると解釈されてきた⁽⁶³⁾。その際、『十誦律』卷四十八の内容が引用されている⁽⁶⁴⁾。すなわち、「そのとき給孤独居士、信心清浄なり。往いて佛の所に到り、頭面作礼し、一面にして坐りをはり、佛に白して言はく、世尊、仏身像の如きはまさに作るべからず、願はくば、仏の我れに、菩薩侍像を作ることを聴したまはば善からんと。仏言はく、作ることを聴すと」と述べられ、仏身像すなわち仏陀の形像は作ら

ないが、「菩薩侍像」ならば差し支えないとしている。そしてこの記述が当時のマトゥラーを反映しているとし、仏像を作り始めた初期において仏陀の像を意図しながらこれを「菩薩」像として受容していたのはマトゥラーだけであったからである。つまりマトゥラーでは仏陀像の制作にあたり、仏陀不表現の伝統が強かったため、そのまま仏陀像を受容する訳にはいかず、ガンダーラでは既に仏像の造像が盛行に向かう情勢にあり、マトゥラーでも仏像を要望する気運が高まりつつあった。そこで仏像を制作するにあたり、妥協策、方便として「菩薩」の名における仏像の受容であったと解釈されている⁽⁶⁵⁾。

一方、近年のイ・チュヒョン教授の論考は「菩薩」在銘像を仏陀像ではなく、それをそのまま菩薩像とみるべきことを主張している。イ教授の主張は次の通りである⁽⁶⁶⁾。

すなわち、マトゥラー初期の、カトラー出土像にみられるように剃髪した上にカバルダ kaparda (巻貝) 形肉髻をもち、衣を偏袒右肩とし、かつ「菩薩」と銘記される、いわゆるカバルダ・タイプの像がある時期（3世紀前期頃か？）以降、有髪で髪束形肉髻、衣を通肩に纏うガンダーラ・タイプへと移行し、その頃から銘記も「仏陀」あるいは「世尊シャーキャムニ」へと置き換わること。さらにほぼカニシカ治世の頃までと推定されるマトゥラー初期の偏袒右肩、カバルダ・タイプの像と、ファッチェナ D. Faccenna の主導するイタリア隊がガンダーラ北部スワートで出土した古様な三尊像浮彫（図16）とが、類似していること。これらを前提としてマトゥラーにおいて初

期のカバルダ・タイプの像からガンダーラ・タイプの像への移行は、それ自身図像上の重大な変化であり、しかもそれは銘記の「菩薩」から「仏陀」への名辞の変化とも密接に対応するとみなしている。よって、上記の最初期のマトゥラー仏とスワート出土の古様なタイプの像は、従来の見解のような仏陀像ならずして、成道以前の因位の釈迦、釈迦菩薩として図像的にも独立したタイプとして制作されたものと主張している⁽⁶⁷⁾。

また、イ教授は上記の主張の根拠の一つとして、これまで仏陀の像とみなされてきたカバルダ・タイプの仏像の服制が仏陀に比定し得るか疑問としている。カバルダ・タイプ像の身体の大部分を透かせるような薄い衣を纏い、腰以下をわずかにドーティーで覆っている姿については、高田博士も疑問を呈しているが⁽⁶⁸⁾、その着衣は薄い一枚布で出来たショールにより近く、古代インドの男性の服飾にごく普通に認められるものであるとしている。そして、この種のショールの類例として、ガネーシュトラ出土の男性神像（ラクナウ州立博物館）やアヒチャトラー出土の弥勒菩薩像等の例では、全体が細い帯状に畳まれて左肩から左手に懸かって垂れ、カバルダ・タイプの仏像ではそれが左肩、左半身を覆い、さらに腰以下を包んでいるという。そして、いかなる装身具も身に着けない。上記のような着衣の形式をもつのは、出家以後の釈迦菩薩の形像に他ならないとイ教授は主張している⁽⁶⁹⁾。

前述のガネーシュトラ出土の男性神像にみられるショールの表現は、マトゥラーの

初期とされる仏陀と王者の浮彫（図12、ラクナウ州立博物館）にも見出され、またこの種のショールはマトゥラー出土のヤクシャ、ナーガ、ヴィーラ像などの神像にも共通しているものであり、初期のカパルダ・タイプの仏像は、マトゥラー出土の神像に近い造形性を示しており、イ教授が主張するようにカパルダ・タイプの仏像が釈迦菩薩を意図して作られているとすれば、仏像に先行するヤクシャをはじめとするマトゥラーの神像彫刻の影響を初期の仏像が受けていたことも無理なく理解することができる。神像の中には、ヴィーラ像のようにヴリシュニ族の英雄が神格化されて造像されているように、そこには当時の王侯貴族の姿が反映されようことは自然な成り行きと言えよう。本稿の冒頭において、*mahāniddeśa* に列挙されている民間信仰の神々の中にも *mahārājavatika* なる偉大なる王を神として崇める人々が居たことは注目されよう。

以上、マトゥラーにおける「菩薩」在銘像についてこれまでの見解を整理し、特に近年のイ教授の研究において、その銘にある「菩薩」なる語が従来の仏陀のことではなく、出家後の釈迦菩薩を意図したものであるという提説を紹介した。

(2)神像崇拜からみたマトゥラーの仏像について

これまでマトゥラーにおける宗教活動の状況および「菩薩」在銘仏像のこれまでの見解を整理してきた。最後に上記の内容を踏まえ、マトゥラーで誕生した仏像、特に「菩薩」なる銘を付した仏像の制作につい

て若干の考察を試みたい。

そこで、今一度「菩薩」在銘仏像の銘文に注目すると、既に杉本卓洲氏が指摘しているが、例えば、カトラー出土像の銘文に、「ブダラキタの母、アモーハアーシにより菩薩（像）が奉納された。父母とともに。自分の僧院に。一切衆生の利益と安楽のために。」とある⁽⁷⁰⁾。この最後の願文である「一切衆生の利益と安楽のために」は、ナーガ像の銘文にもみられ、例えば Rāl-Bhaḍar mound 出土のナーガ像では、カニシカの8年に世尊ブーモ・ナーガ bhagavato bhūmo nāga のために貯水池および森林が一切衆生の利益と安楽のために捧げられたと銘文に記してある⁽⁷¹⁾。また前述のジャマールプル出土のダディカルナ龍王の神殿に奉納された石板の銘文にも「一切衆生の（利益と）安楽のためになりますように」という願文があり、これはカトラー出土の「菩薩」在銘像の願文とも一致し、またナーガ像も銘文において bhagavato と称され、ヤクシャやヴィーラ（英雄神）同様、バクティ信仰を受けていたことを示している⁽⁷²⁾。ただ、「菩薩」在銘像には bhagavato の呼称は見出せず、明確な確証はないが、共通する願文を有することからも、「菩薩」在銘像とヤクシャ、ナーガそしてヴィーラ（英雄神）が同じ祈願の対象として造立されたことは想定できるであろう。

これに関して H. ダヤルは菩薩像崇拜とバクティ信仰との関連を強調しており、彼によれば菩薩こそ一般民衆が祈願するものをかなえてくれる存在としてバクティ信仰の対象となり、超人間的な仏陀よりも人間的な存在として親しみをもたれたと主張し

ている⁽⁷³⁾。このダヤルの見解を併せて考えれば、前述のイ教授の「菩薩」在銘像が出家後の釈迦菩薩であるという見解においてその着衣が当時の男性王侯貴族の姿を踏襲しているとみるならば、ダヤルの見解と重なる部分もある。その他、仏像がいかなる存在であったかについては、杉本氏が興味深い指摘をされている。「菩薩」在銘像ではないが、カニシカ14年紀年銘の仏像には、その呼称に *Bhagavāto/pitāmahāsya/saṃmya-saṃbuddhasya/svamatasya devasya*（世尊・父祖・正等覚者の、自ら信ずる神の）を用いており、その中でも *pitāmahā*⁽⁷⁴⁾と *svamata-deva* という称号に注目し、ともに仏典中に見出し難い語であって、仏像崇拜における場合の仏陀観が、仏教教理上の仏陀のイメージとは少なからず相違していたこと、特に *Deva* と呼ばれたことは、菩薩がヤクシャやナーガと同様に受け取られたように仏陀も神として理解されていたことを物語るとしている⁽⁷⁵⁾。また、仏陀を *Deva* と呼ぶ他の事例は、既にパールフトのジャータカ図に見出される。それは「ティミンガラ・ジャータカ図」で、その銘文をみると、「*vasuguta (vasugupta)* は *mahādeva* によって海の怪魚 *Timitimīṅgila* の腹から救われた」と読めるようで、仏陀の前世が *mahādeva* と呼ばれていることがわかる⁽⁷⁶⁾。その他パールフトの別の銘文においても「世尊 *mahādeva* の、多くの象の（かしづく）座」という事例が確認でき、明らかに仏陀が *mahādeva* と呼ばれていることがわかる⁽⁷⁷⁾。この *mahādeva* はシヴァの異名であり、ティミンガラ・ジャータカ図では、海上での災難などからの救い主として *mahādeva*

が登場している。仏陀が一般民衆の祈願するものをかなえてくれる存在であり、また救済者としてのイメージからも、仏陀像が他の民間信仰の神々と近い存在として造立されていたことがわかるであろう。特に2でみたようにマトゥラーにおける宗教事情を鑑みても、特に「菩薩」在銘の仏像は、実態的にはマトゥラーで信仰されていた神々の一つとして、民間信仰の神々であるヤクシャ、ナーガ、ヴィーラ（英雄神）の神像と同一レベルで信仰を受けていたことが推察されるであろう。

おわりに

以上、マトゥラーの仏像誕生の状況を仏像以外の作例と銘文資料を通して概観した。特に本稿は民間信仰という視点で、まずインド内部での仏像誕生の地であるマトゥラーがどのような宗教的環境であったかを整理し、次にサカ＝クシャーン時代の宗教活動について概観した。

『根本説一切有部毘奈耶薬事』の記述にあったように仏教側からみればマトゥラーはヤクシャたちが蔓延り、乞食がし難い環境であり、そのことはマトゥラーにおけるヤクシャの丸彫神像の作例が多数確認できることから推察できた。次にサカ＝クシャーン時代におけるマトゥラーの宗教活動を概観したが、プトレマイオスの言葉を俟つまでもなく、マトゥラーは「神々の町」としてヒンドゥー教、ジャイナ教、その他ヴィシュヌ信仰に組み込まれるヴァースデーヴァ信仰が盛んに信仰され、またナーガ信仰においては仏教と共存して存続

していたこともわかり、民間信仰を基盤として、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教それぞれが民間（土着の）信仰を積極的に取り入れていた様相が確認できた。そういった状況の中でマトゥラーにおいて仏像の出現をみるのである。

続いてマトゥラーにおける「菩薩」在銘像に関して、高田修博士および近年のイ・チュヒョン教授の研究を紹介し、これまでの「菩薩」在銘像の見解を整理した。そこで注目されるのが、イ教授の見解であり、「菩薩」在銘像について、仏陀ではなく、成道後の釈迦菩薩であるという見解は非常に興味深く、特にその根拠の一つとして挙げている一種のショールのような着衣は、当時の男性王侯貴族のものを踏襲しているとするならば、それはまさにヤクシャやナーガ、ヴィーラ像などの民間信仰の神々の造形とも共通する点は非常に興味深い。そして、最後にバクティ信仰を受けているナーガ像に付された銘文の願文にある文言「一切衆生の利益と安楽のために」と「菩薩」在銘の銘文の文言が一致するという点、また仏陀が deva や mahādeva と呼ばれる点に注目することにより、仏陀像が神に近い存在として信仰されていたことは、マトゥラーにおいては仏像といえども民間信仰の神々の信仰の目的と同一レベルで制作され、信仰されていたことが推察されよう。

また、インドにおいて単独の菩薩像を造像しても、ガンダーラのように仏三尊像の脇侍に菩薩像を配さない状況が生じた背景には、上記のようなマトゥラーにおける宗教活動の様相および「菩薩」在銘像の受容のあり方が恐らく作用していると考えられ

る。このようなマトゥラーにおける仏像の誕生の状況からも、ヤクシャやヴィーラ像などの先行する民間信仰の神像から「菩薩」在銘像への移行がなされていたことが推察されるであろう。

[註]

- (1) Agarawara, V. S. (1970): 10-11.
- (2) 『南伝大蔵経』第四十三巻、一五〇頁
- (3) 註(2)前掲書
- (4) 中村元・早島鏡正訳 (1964): 186.
- (5) 肥塚隆・宮治昭編 (2000): 挿図18. 参照。
- (6) 肥塚・宮治 (2000): 挿図19-20. 参照。
- (7) サカ・クシャーン時代におけるマトゥラーの通商路に関しては、高橋堯英 (2013) 「サカ=クシャーン時代の北インドの都市マトゥラーについて」『法華仏教と関係諸文化の研究 伊藤瑞叡博士古希記念論文集』山喜房佛書林、827-835. に詳しい。
- (8) サカ・クシャーン時代におけるマトゥラーの宗教活動の様相については、高橋堯英 (2004) 「サカ・クシャーン時代に於けるマトゥラーの宗教事情に関する一考察」『大崎学報』160号 (中村瑞隆先生追悼号)、79-91. 参照。
- (9) 杉本卓洲 (1983): 79-80. 参照。
- (10) 『南伝大蔵経』第十九巻、三五六頁。
- (11) 大正蔵第二十四巻、四三頁 b-c.
- (12) 拙稿 (2003): 55-71. マトゥラーおよび周辺出土の作例については、図1、9~10、11、13~14参照。
- (13) パールカムから6.43kmの位置。
- (14) Quintanilla, Sonya Rhie (2007): Fig.18.
- (15) Quintanilla, Sonya Rhie (2007): Fig.19.

- (16) 拙稿 (2003) : 61-62, 図13-14. および Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : Fig.86-87.
- (17) 銘文は次の通りである。
1. (a) [m] (a) ty[e]na pratihāre-
 2. [na]....jayaghosēna
 3. [bh] (aga) [v] (a) to ā[gn]isa
pra[t]i[m] (ā)
- 反対側
1. [ka]ritā p[rī]yamtām[a]ga[ya]
- Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : *History of Early Stone Sculpture at Mathura CA.150BCE-100CE*, Brill, 259, Appendix I. 9.
- (18) 拙稿 (2003) : 61-62, 図11, および Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : Fig.88-89.
- (19) Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : Fig.91-92.
- (20) Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : Fig.93.
- (21) Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : Fig.94-95 a, b.
- (22) Srinivasan, Doris M. (1997) : 216.
- (23) Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : Fig.96.
- (24) Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : Fig.97.
- (25) Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : Fig.98-99.
- (26) 銘文については Garde, M. B. (1915-16) : 101-109. および拙稿 (2003) : 60. 参照。
- (27) 杉本 (1983) : 82. および拙稿 (2003) : 63-64.
- (28) 例えば、チャトラパティ・シヴァジ・マハラージ博物館 (ムンバイ) の仏立像台座には仏陀を bhagavato śakyamune (世尊シャカムニ) (定方晟 (1990 b) : 119, § 180.) その他、パトナ博物館所蔵仏立像基部の銘文にも仏陀を bhagavāto pitāmahāsya sammyasambuddhasya svamatasya devasya (世尊・父祖・正等覚者・自己の教義の確立者・神) という呼称で呼んでいる (定方晟 (1990 b) : 99, § 81.)。
- (29) 高橋堯英 (2004) : 79-91. 参照のこと。
- (30) 高橋堯英 (2004) : 79-80. Lüders, H. (1961) : § 94.
- (31) マトゥラー市のチョウラシーと呼ばれるジャイナ教寺院付近の井戸から発見されたカニシカ暦28年のブラフミー碑文によると、フヴィシカ王の治世にカラサレーラとヴァカナという封建領主2名が550プラーナという金子を小麦粉製造業者のギルドともう一つのギルド各々に投資し、それらのギルドから利子によって日々100人のバラモンに食事を提供し、同時に若干量のひき割り、塩、そして野菜5包みを飢餓に苦しむ打ちひしがれた人々のために提供したと伝えている。高橋堯英 (2004) : 80.
- (32) 高橋堯英 (2004) : 80.
- (33) 定方晟 (1991) : 80
- (34) 拙稿 (2007) : 92-93. カールティケーヤの丸彫像は南インド・アーンドラ地方のナーガールジュナコンダにも作例 (第82 址) が知られ、イクシュヴァーク朝初代チャーンタムーラ王に信仰されていた。拙稿 (2007) : 92-93.
- (35) 肥塚・宮治 (2000) : 図版100.、東京国立博物館他編 (2002) : 図録 no.28. 参照。
- (36) 肥塚・宮治 (2000) : 挿図92.
- (37) 肥塚・宮治 (2000) : 挿図95.
- (38) ヴィシュヌについては、四臂像の他にヴァースデーヴァを最高神とし、彼からサンカルシャナ、プラドムナ、アルニッタが出現するとみなすチャトル・ヴェーハ・ヴィシュヌ像も見出される。Srinivasan, Doris M. (1997) : Pl.18. 18-19. 参照。
- (39) 高橋堯英 (2004) : 81.

- (40) Rosenfield, J. M. (1967) : 22-23. coin 17. (Pl. I.)
- (41) Rosenfield, J. M. (1967) : coin 158-163. (Pl. VIII.)
- (42) 高橋堯英 (2004) : 81.
- (43) その他の例として、一面のシヴァ・リング、(Aghāpura, Bharatpur, Rajasthan, 紀元後 1 世紀, Bhratpur State Museum) がある。
Srinivasan, Doris M. (1997) : Pl. 17. 8.
- (44) 肥塚・宮治 (2000) : 挿図249参照。
- (45) 肥塚・宮治 (2000) : 挿図249. 銘文については定方 (1990 a) : 66. ◎3.
- (46) 肥塚・宮治 (2000) : 挿図90, 250.
- (47) 東京国立博物館他編 (2002) : 図録 no.11.
- (48) 肥塚・宮治 (2000) : 118.
- (49) ヴァースデーヴァ (・クリシュナ) は『マハーバーラタ』では、ヤーダヴァ族の一部をなすヴリシュニ族の英雄とみなされ、死後神格化され、バガヴァットともみなされ、4人の親族すなわち、彼の3人の息子サンカルシャナ、プラデユムナ、シャーンバおよびプラデユムナの息子ア Nil ッダとともにパンチャ・ヴィーラ「5人の英雄」として熱烈な崇拜を受けていた。石黒淳 (1994) : 122.
- (50) マトゥラー博物館 (GMM. no. Q1.)
Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : 260-261. (Appendix I.), Fig.267. 定方 (1990 b) : 107.
- (51) マトゥラー博物館 (GMM. no.367.) 定方 (1990 b) : 107-108.
- (52) 定方 (1990 b) : 107. および付図 7. マトゥラー博物館 (GMM. no. E.20).
- (53) ラージャスタン州チトルガルフ地区ゴースンディ出土、ウダイプール地区ナーガリ出土の碑文はヴァースデーヴァを祀る祠堂があったことを伝え、また中インドのビルサ出土の八角形のガルダ柱断片には、そのガルダ柱がゴータミーの息子バーガヴァタ王により、バガヴァーンを祀る祠堂の中に建てられたと記されている。ベースナガルの有名なガルダ柱の碑文にもヘリオドロス自身がヴァースデーヴァ信者と名乗っている。その他、西インドのナーナガート石窟寺院に刻まれた碑文にも西インドにおいてサンカルシャナ・ヴァースデーヴァ信仰が栄えたことを伝えている。石黒淳 (1994) : 123-124.
- (54) 拙稿 (2013) : 28.
- (55) Quintanilla, Sonya Rhie (2007) : Fig.281 (Mathura 出土、マトゥラー博物館), 305 (Ganeśara 出土、ラクナウ州立博物館).
- (56) 肥塚・宮治 (2000) : 図版53, 54. マート神殿からはこの他、武人像 (頭部欠損)、とんがり帽子を被った王侯像頭部も出土している。
- (57) 定方 (1990 a) : 71-72.
- (58) 定方 (1990 a) : 75.
- (59) 高橋堯英 (2004) : 87-88.
- (60) 安田治樹 (2013) : 813-825.
- (61) Ju-Hyung, Rhi (1994) : 207-225.
- (62) 杉本卓洲 (1997) : 102.
- (63) 安田治樹 (2013) : 817-818.
- (64) 大正蔵第二十三巻、三五二頁 a.
- (65) 高田修 (1967) : 409-411.
- (66) Ju-Hyung, Rhi (1994) の論文が筆者未見のため、安田治樹 (2013) を参照する。
- (67) 安田治樹 (2013) : 818-819.
- (68) 高田修 (1967) : 372.
- (69) 安田治樹 (2013) : 820-821.
- (70) 定方晟 (1990 a) : 62.

- (71) 定方晟 (1990 b) : 105.
- (72) 杉本卓洲 (1983) : 99.
- (73) Dayal, H. (1970) : 31-35.
- (74) Pitāmaha は一般には Brahman や Brahmā の称号とされている。杉本卓洲 (1983) : 註 (37)
- (75) 杉本卓洲 (1983) : 100.
- (76) 杉本卓洲 (1981) : 1-19. 特に p.3.
- (77) 杉本卓洲 (1981) : 11.
- [参考文献一覧]
- ・洋書
- Agarawara, V. S.
1970 *Ancient Indian Folk Cults*, Varanasi.
- Dayal, H.
1970 *The Bodhisattva Doctrine in the Buddhist Sanskrit Literature*, Delhi.
- Garde, M. B.
1915-16 *The Site of Padmāvati, Archaeological Survey of India, Annual Report 1915-16*, 101-109.
- Ju-Hyung, Rhi
1994 *From Bodhisattva to Buddhas: The Beginning of Iconic Representation in Buddhist Art, Artibus Asiae*, LIV-3/4, 207-225.
- Lüders, H.
1961 *Mathura Inscription*, Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht.
- Quintanilla, Sonya Rhie
2007 *History of Early Stone Sculpture at Mathura CA.150BCE-100CE*, Brill.
- Rosenfield, J. M.
1967 *The Dynastic Arts of the Kushans*, Berkeley and Los Angeles.
- Srinivasan, Doris M.
1997 *Many Heads, Arms and Eyes Origin, Meaning and Form of Multiplicity in Indian Art*, Brill.
- ・漢訳経典他
- 『大正新修大蔵経』第二十三巻 律部二
『大正新修大蔵経』第二十四巻 律部三
『南伝大蔵経』第十九巻
『南伝大蔵経』第四十三巻
- ・和書
- 石黒淳
1994 「ヴィシュヌ信仰の形成と発展—図像の形成と変容をめぐって—」『人間文化 (愛知学院大学人間文化研究所紀要)』第9号、119-144.
- 肥塚隆・宮治昭編
2000 『世界美術大全集 東洋編13 インド (1)』小学館
- 定方晟
1990 a 「マトゥラー刻文の和訳 (I)」『東海大学紀要文学部』第53輯、61-82.
1990 b 「マトゥラー刻文の和訳 (II)」『東海大学紀要文学部』第54輯、97-126
1991 「マトゥラー刻文の和訳 (III)」『東海大学紀要文学部』第55輯、75-89.
- 杉本卓洲
1981 「神 deva と呼ばれた仏陀」『金沢大学文学部論集・行動科学篇』創刊号、1-19.
1983 「Yakṣa と菩薩」『金沢大学文学部論集 (行動科学科篇)』第3号、79-108.
1997 「マトゥラーにおける仏像崇拜の展開

(その1) 『金沢大学文学部論集
行動科学・哲学篇』第17号、83-110.

高田修

1967 『仏像の起源』岩波書店.

高橋堯英

2004 「サカ・クシャン時代に於けるマトウラーの宗教事情に関する一考察」『大崎学報』160号(中村瑞隆先生追悼号)、79-91.

2013 「サカ=クシャン時代の北インドの都市マトウラーについて」『法華仏教と関係諸文化の研究 伊藤瑞叡博士古希記念論文集』山喜房佛書林、827-835.

東京国立博物館他編

2002 『インド・マトウラー彫刻展』図録.

中村元・早島鏡正訳

1964 『ミリンダ王の問い インドとギリシアの対決(2)』(東洋文庫15)、平凡社.

永田郁

2003 「インド古代初期におけるヤクシャの神像彫刻について」『名古屋大学博物館報告』第19号、55-71.

2007 「南インド・アーンドラ地方におけるヤクシャ信仰の一側面」『汎アジアの仏教美術』(宮治昭先生献呈論文集編集委員会編)中央公論美術出版社、78-100.

2013 「アーンドラ地方における神像彫刻についてーパニギリ出土の神像? 彫刻の紹介を中心にー」『崇城大学芸術学部研究紀要』第6号(2012)、23-37.

安田治樹

2013 「マトウラーの「菩薩」在銘像に関する提説をめぐって」『法華仏教と関係諸文化の研究 伊藤瑞叡博士古希記念論文集』山喜房佛書林、813-825.



図1 ヤクシャ立像 パールカム出土
マトゥラー博物館
(筆者撮影)



図2-a ヤクシャ立像
バラナ・カラン出土
マトゥラー博物館
(筆者撮影)

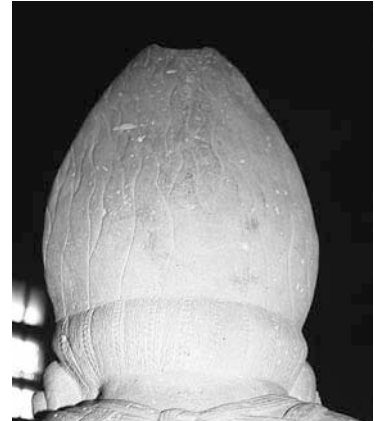


図2-b. 図2-a. 部分
(筆者撮影)



左：図3 ヤクシャ立像、バラナ・カラン出土、マトゥラー博物館 (筆者撮影)



中央：図4 ヤクシー倚坐像、ジングキ・ナガラ出土、マトゥラー博物館 (筆者撮影)



右：図5 ヤクシャ立像、パワーヤー出土、グワリオール考古博物館 (筆者撮影)



左：図6 カールティケーヤ立像、カンカーリー・ティーラー出土、マトゥラー博物館（筆者撮影）
 中央：図7 スーリヤ像、カンカーリー・ティーラー出土、マトゥラー博物館（筆者撮影）
 右：図8 バガヴァーン・ナーラーヤナ立像、ナダン出土、マトゥラー博物館（東京国立博物館他編（2002）図録 No.28. より転載）



図9 ヒンドゥー四神を表す浮彫、マトゥラー出土、マトゥラー博物館（肥塚隆・宮治昭編（2000）挿図94より転載）



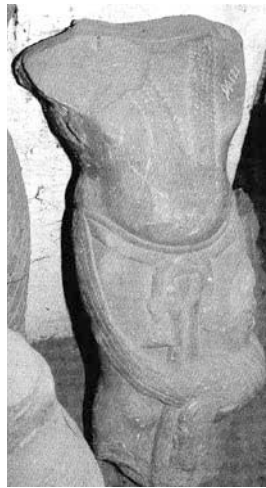
図11 リンガ崇拜を表す浮彫、マトゥラー出土、マトゥラー博物館（筆者撮影）



図10 シヴァ・リンガ崇拜、ブーテーシュワル出土、マトゥラー博物館（筆者撮影）



図12 仏陀と王者、カンカーリー・ティラー出土、ラクナウ州立博物館（肥塚隆・宮治昭編（2000）挿図72より転載）



左：図13
男性トルソ、モーラー出土、マトゥラー博物館（筆者撮影）

右：図14
トルソ、モーラー出土、マトゥラー博物館（Quintanilla, S. R. (2007): fig.278より転載）



図15 仏三尊像、カトラー出土、マトゥラー博物館（筆者撮影）



図16 梵天勸請 スワート（パキスタン）出土
ベルリン国立インド美術館（東武美術館他編（1998）『ブッダ 大いなる旅路』展図録、No.28より転載）

